

「嵐を静める」という小標題が掲げられます。8章から始まった治癒物語は、一見すると人間への癒しから自然現象の猛威を征服するかのような印象を受けるように記述してまいります。はたしてマタイは病いだけでなく、自然界をも支配する力を有する超越者であることを主張しようとしたのでしょうか。

マタイはこの伝承記事をマルコ4:35-41から得ています。おそらくマルコが基の資料とした伝承が上述したような超越的な神話論だったのかと考えられます。それをマルコはイエスが風や波を叱りつけて静かにさせる物語へと発展させました。そのマルコを受けて、マタイは本日の箇所、単なる自然界への従順命令を人間の現実に置き換えて単なる病いの癒し以上に「生きるという行為への癒しの物語」へと昇華させてゆくのです。

マタイは、マルコがテーマとしたような「弟子の無理解」をあっさり放棄しています。マルコは繰り返し弟子たちの無能さを厳しい口調で批判し、「まだ信じないのか」(マルコ4:40)と弟子たちを追い詰め、「非常に恐れて」(同41)と描写するほど震え上がらせたりしています。しかし、マタイはそんな叱りや追求は採択しなかったのです。彼は26節で「なぜ怖がるのか。信仰の薄い者たちよ。」という柔らかで暖かい励ましをもって、マルコとは正反対にイエスが弟子たちの怯える心に寄り添われる姿を描き出します。

マタイにとって採用すべきテーマは「従う」というモチーフでした。もちろんイエスのあとに弟子たちが従うという文面状のことは当然として、彼が提案する新しい課題とは、初代教会とそこに生きる人々への「癒し」の迫りだったのです。そこには当時、ユダヤ教のみならずローマ帝国の迫害が一挙に激しさを増したという背景がありました。イエス一行が乗り込む「舟」はそのまま教会を指し示すのです。弟子たちをはじめ、そこに集う人々には平穏無事な生活が保障されるどころか、イエスに従ったがゆえに危険な目に遭わねばならないということなのです。ですから、25節の「主よ、助けて下さい。」という弟子たちの痛切な叫びは、文法的には祈りの形式を踏まえています。これに応

じて、イエスは弟子たちに励ましを掛け(26)、その後に嵐を静めます(マルコは逆)。つまり、励まし・慰め・愛し合うという作業が何ものよりも最優先すべきだという基本的な人間理解をマタイは「従うという問いかけ」として押し出すのです。

わたしたちは一体何によって一致するのでしょうか。目標でしょうか。思想や信仰でしょうか。確かにそういうことで一体感を味わう人もいます。しかし、そこには人間への大きな誤解があります。人は共通のものに関わることによって一致するように見えて、実は人が人たる基本的な共通の事実、つまり、励まし・慰め・愛し合うことを自らの内にしっかりと「従う」こととして自覚するまでは、決して一つにはなれないのではないのでしょうか。マタイは迫り来る迫害の嵐のただ中でそのことを考えたのでしょうか。その事実は一致団結などという絵空事ではなく、「それ」を認識することにおいてだけどんな絶望や痛みの中にあっても励まし続け合えるのです。それとは「罪」による一致なのです。罪において一つ。従うという一体感に内容を与えるのはイエスの贖罪愛、これだけなのです。